

# 万葉集の卷七と卷十

——雑歌部と人麻呂歌集——

渡 瀬 昌 忠

## 一、卷七と卷十との共通性

万葉集の卷七と卷十とは、少なくとも人麻呂歌集とのかかわりに関する限り、万葉集中で最も親近な関係にある。はやく賀茂真淵はその『万葉考別記一』の冒頭「卷のついで」に、

今の七と十の卷は、歌もいさゝか古く、集め体も他と異にて、此二つの卷はすがたひとしければ、誰ぞ一人の集めなり。(旧版賀茂真淵全集第三、三〇五五ページ)

と言ひ、また、万葉集の卷々を整理して、卷一、二、十三、十一、十二、十四の六卷をこの順に一、二、三、四、五、六とした後に、

今の十を七とす(凡古歌なるが中に、藤原の古にし里とよめる言あれば、奈良の始の人の集ならん)。今の七を八とす(是も古歌にて、集の体右とひとし)。

と言つて、卷十・卷七の順に二卷を並べて七、八とした。

真淵晩年の門人本居宣長は、師の万葉集整理には批判的であったが、卷七・十に關しては、『万葉集重載歌及卷の次第』の「全篇卷の次第の事」に、

〇七 十 これ一類なる事はあらは也。又次第はいかにも有へし。(筑摩書房版『本居宣長全集第六卷』六ページ)と言つた。「次第はいかにもあるべし」と言うのは、真淵説の卷十・七という順序に対する発言であろう。その順序はともかくとして、卷七と卷十との両卷が一類をなすものであることについては、真淵と宣長との意見は一致してい

たのである。

巻七と巻十とを一類のものとする見方にとって、二つの障害がある。一つは、現万葉集において巻七と巻十とが、巻八と巻九とを中に置いて、離れて存在することである。真淵のように勝手に並べ変えることが許されないとすれば、これは両巻の関連を考える者にとって、避けて通ることの出来ない事実でなければならない。伊藤博氏は、「十六卷本万葉集」(『沢瀉博士喜寿記念万葉学論叢』昭41年7月)において、巻七・八と巻九・十との四巻を、対立と対比との整然たる関係を有する小グループとして捉えようとした。わたしの見るところ、たぶん、巻七と巻十との共通性と裏腹に、両巻の間に存在する重大な相違、おそらくは巻の根幹となった資料の相違があつて、それが、四巻の中で両巻を最も遠く引き離し、また巻七と巻八とを最も近づける要因となっているのではないかと思われるが、その問題については、また別の機会を待つことにしたい。

いま一つの障害は、巻七が雑歌・譬喻歌・挽歌の三大部立をとるのに対して、巻十は四季分類をとっていることである。この相違は、両巻が全く別個の次元に立つ編纂物ではないかという疑問を起ささせる。雑歌・譬喻歌・挽歌という三大部立は、巻七のはかに巻三にもあり、それは雑歌・相聞・挽歌の三大部立の一変形(相聞が譬喻歌へと移行した形)と見るべきものである。万葉集二十巻中の巻七の位置を考える時、この点を軽視することはできない。中西進氏が、巻七までの「第一部万葉」に対して巻八から始発する「第二部万葉」を考えておられるのも(『新万葉集の出發——万葉集巻八の形成——』『成城文芸46』昭42年5月)、右の二つの障害を重視されるからである。

しかし、巻七以後にも、巻九は雑歌・相聞・挽歌の三大部立をとり、巻十三・十四(未勸国)は雑歌・相聞・問答・防人歌・譬喻歌・挽歌という三大部立からの変形(相聞が相聞・問答・譬喻歌に分化した形)を見せている。しかも、巻七にあって、三つの部立は必ずしも等分の重要性をもつわけではない。歌数からしても、

雑歌 二二八首(うち旋頭歌二五首)

譬喻歌 一〇八首(うち旋頭歌一首)

挽歌 一四首(旋頭歌なし。最後の羈旅歌一首は雑歌の補遺とも見られる)

右のように挽歌部が桁違いに少ない。そして何よりも、編纂資料としての入麻呂歌集からの採録は、雑歌四一首、譬

喻歌一五首に対して、挽歌には一首も無い。少なくとも本稿の当面する人麻呂歌集との関係に関する限り、卷七の挽歌部は一往は考慮の外においてもよさそうである。

卷七の主体は雑歌と譬喻歌にあると言ってよいであろう。すると、卷十も四季を雑歌と相聞とに分かっているのであるから、卷七・十両巻は、雑歌と相聞（譬喻歌）とを主要部分とする点において、むしろ共通するのである。これを両巻の共通性の第一点とすることができよう。

卷七と卷十との共通性の第二は、共に作者名や作歌事情を例外的にしからず、雑歌においては「詠——」、譬喻歌・相聞においては「寄——」を標目として掲げる分類を有することである。しかも、詠物と寄物とを共有する、この全き一致は、卷七・十両巻のみのもので、他の巻には見られない。

第三にあげるべき両巻の共通性は、共に人麻呂歌集を資料として用いているのみならず、その際、雑歌部には非略体歌を主とし、相聞（譬喻歌）部には略体歌を主として用いる点である。雑歌には非略体歌、相聞・譬喻歌の類には略体歌という画然とした区別が卷七・十両巻の内部に共通して存するという事は、人麻呂歌集研究史の上で、その原本における略体歌部と非略体歌部との存在に気づかせる重要な契機となったものであるが、それは、人麻呂歌集原本や万葉集各巻の成立について考える上で、なお汲めども尽きせぬ泉であるように思われる。

もちろん、卷十は四季分類を有し、羈旅歌を例外的にしからず季節歌であるのに対して、卷七は季節歌を例外的にしからず、きわめて多くの羈旅歌を蔵する歌巻である、といった対照的な相違を有している。したがって歌どもの内容についてもさまざまな相違を有するのであるが、それが対照的であればあるほど、むしろそれらの相違を右のような共通性との関連のもとに考えてみなくてはなるまい。

本稿の以下には、特に両巻の雑歌部における、人麻呂歌集所出歌の扱い方の共通性について述べる。

## 二、卷七雑歌と卷十秋雑歌

### (1) 非略体歌の冒頭掲出

卷七も卷十も人麻呂歌集所出歌を尊重的態度で扱っている。のみならず、そこにきわめて顕著な手法の類似が認め

られる。

第一は、卷七の雑歌および卷十の秋雑歌ではそれぞれの詠物的標目の冒頭部に人麻呂歌集の非略体歌を置いていることである。

具体的に見よう。卷七雑歌の二六標目中で、人麻呂歌集から歌を採録しているのは、第一標目たる「詠天」を初めとして、次の九標目である。その標目と標目下の全歌数とその中での人麻呂歌集のありようを記してみる。

詠天 一首 非略体歌のみ。

詠雲 三首 最初の二首が非略体歌。

詠山 七首 最初の二首が非略体歌、次の一首が略体歌。

詠河 一六首 最初の二首が非略体歌。

詠葉 二首 非略体歌のみ。

羈旅作 九〇首 第二十七首と最後の四首とが略体歌。

就所発思 三首 最初の一首が古歌集、続く二首が非略体歌。

行路 一首 非略体歌のみ。

旋頭歌 二四首 最初の二三首が非略体歌、続く五首が略体歌、以下、非略体歌一首、略体歌一首、非略体歌

一首、略体歌二首。

以上の九標目のうち、「詠天」「詠葉」「行路」の三標目下には人麻呂歌集非略体歌のみが採られ、「詠雲」「詠山」「詠河」「旋頭歌」の四標目下には、その冒頭に非略体歌が置かれている。この事實は、卷七雑歌において人麻呂歌集の非略体歌が資料として用いられたこと、しかもそれが尊重的態度をもって扱われたことを物語る。

「羈旅作」には非略体歌が採られていないので、これをしばらく措くと、非略体歌が採られて、しかもそれが標目の冒頭以外に置かれているのは、「就所発思」の例のみである。これは、卷七雑歌部において唯一の例外なので、十分な考察を加える必要がある。ここは、

問答(一二五一・一二五二)右二首、詠鳥

(一二五三・一二五四) 右一首、詠白水郎

臨時(一二五五・一二五六)

就所発思旋頭歌(一二六七)

右十七首、古歌集出

という古歌集所出歌群の後、

寄物発思(一二七〇)

右一首、古歌集出

という古歌集所出歌の前に、非略体歌二首(一二六八・一二六九)の切り入れられた形を見せる部分である。ここでのみ、人麻呂歌集の非略体歌二首が標目下の後尾に付載された形になっているのは、なぜか。

また、古歌集の「就所発思」の一首は旋頭歌であるにもかかわらず、そのすぐあとに来る「旋頭歌」の標目下には入れられていない。卷十一巻頭の「旋頭歌」の標目下には、五首の古歌集所出歌(一二六三・一二六七)が人麻呂歌集の旋頭歌と共に採録されているから、卷七雑歌の「旋頭歌」標目下にも、人麻呂歌集所出の旋頭歌と共にこの一首の古歌集歌が採録されていてもよさそうに思われるのに、そうなっていない。それはなぜか。

右の二つの事実の由って来たところは、おそらく一つであろう。それは、古歌集の原本に「就所発思旋頭歌」の標目がすでに存在したからにちがいない。

わたしの見るところでは、卷十一巻頭の「旋頭歌」の標目下にある五首の古歌集所出歌も、卷七雑歌の右の一首と共に、古歌集の原本においては「就所発思旋頭歌」の標目下にあった。卷七の「大宮人の踏みし跡所」の滅びを思う

もしもしきの大宮人の踏みし跡所 沖つ浪来寄らずありせば失せずあらましを(一二六七)

この一首は、おそらく古歌集の原本においてもこの標目下の最初の一首としてあったろう。卷十一の五首は、  
岡前さきの廻たみたる道を人な通ひそ ありつつも君が来まさむ曲道まがみちにせむ(一二六三)

玉垂れの小簾かすのすけきに入り通ひ来ね たらちねの母が問はさば風と申さむ(一二六四)

この最初の二首が「岡前の廻みたる道」をかよ通って来る男への思いであり、次の、

うち日さす宮道に会ひし人妻ゆゑに 玉の緒の思ひ乱れて寝る夜しぞ多き(二三六五)  
まさ鏡見てしかと思ふ妹も会はぬかも 玉の緒の絶えたる恋の繁きこのころ(二三六六)

この二首は「宮道」に会った人妻ゆゑの男の思ひであり(共に枕詞「玉の緒の」を用いる)、  
海原の路に乗りてやあが恋ひ居らむ 大舟のゆたにあるらむ人の児ゆゑに(二三六七)

この最後の一首は「海原の路」に男の恋うる人の児ゆゑの思ひである。五首はすべて、古歌集の原本においては、右の第一首の次に、「所」に就いて思ひを發した歌として、この標目下に、おそらくこの順序で収められていたと思われる。と言うのは、最後の一首は「海原の路」という「所」に就いて歌いながらも、「大舟」という「物」に寄せて「人の児」への思ひを發した歌に近づいているので、「寄物發思」という次の標目へのつながりは円滑だと言えるからである。

古歌集の原本においては「就所發思旋頭歌」の標目下に、この順序で並んでいた六首の旋頭歌のうち、「百磯城の大宮人」への思ひを歌った行幸関係と思われる第一首(二二六七)のみが巻七雑歌に残され、明らかに男女の恋を歌った五首(二三六三、二三六七)が相聞往來の歌として巻十一の「旋頭歌」の標目下に切り出されていって、「右五首、古歌集中出」と左注を付されたのであろう。

巻向の山という「所」に就いて常無き思ひを歌った非略体歌の、

児らが手を巻向山は常に在れど過ぎにし人に往き巻かめやも(二二六八)

巻向の山辺とよ響みて往く水の水沫みなあわのごとし世の人われは(二二六九)

この二首は、右の古歌集の五首の旋頭歌が切り出されていったあとに切り継がれ、「右二首、柿本朝臣人麻呂之歌集出」と左注を付されたものと考えられる。その直後には「寄物發思」の標目の下に、さらに古歌集の、  
こもりくの泊瀬の山に照る月は満ち欠けしてぞ人の常無き(二二七〇)

右一首、古歌集出

泊瀬の山の月に寄せて無常を歌った歌があつて、常無き思ひを歌った二首の非略体歌は、いかにもここに切り入れるのに適當なものと判断されたのであろう。古歌集の原本においては「就所發思旋頭歌」の標目下に六首の旋頭歌が右に

見たような順序で並び、さらにそれに続けて「寄物発思」の短歌があったということ、および、このあたりの標目の配列順序が古歌集以来のものであったということの蓋然性は、きわめて高いのである。  
古歌集のこの部分の原形を復元すれば、次のようになる。

問答

(一一五・一一五二)

右二首、詠鳥

(一一五三・一一五四)

右二首、詠白水郎

臨時

(一一五五・一一五六)

就所発思旋頭歌

(一一六七、一二六三・一二六七)

寄物発思

(一二七〇)

そして、もしこの一連がこのままの形で巻七雑歌に採られていれば、

右二十三首、古歌集出

と左注が付されたであろう。ところが、「就所発思」の旋頭歌五首が巻十一へ切り出され、そのあとに非略体歌二首が切り入れられた結果、現形のように、非略体歌二首に「右二首、柿本朝臣人麻呂之歌集出」、その前に「右十七首、古歌集出」、その後「右一首、古歌集出」の、三つの左注が必要となったのである。

なお、もし巻七雑歌の他の標目の場合と同様に、「就所発思旋頭歌」の標目下においても、その冒頭に卷向山の二首の非略体歌を入れたら、どうだったろうか。その非略体歌二首は共に短歌であるから、標目に小字で注記された「旋頭歌」の記載とは、歌体が合わなくなったはずである。古歌集以来のこの標目を保存する限り、そうした矛盾を避け

るためにも、やはりこの標目下の冒頭には古歌集の旋頭歌一首があるべきだったのである。

卷七雑歌部において非略体歌の採録された八標目のうち「就所発思」のみに非略体歌がその冒頭に置かれていないのは、こうした、きわめて特殊な事情に基因するものであった。これを唯一の例外として、他の非略体歌はすべて、卷七雑歌部の撰者によって、その歌の内容にふさわしいと認められた標目下の、その冒頭に入れられたのである。

卷十の秋雑歌の一八標目の中で、人麻呂歌集から歌を採っているのは、第一標目たる「七夕」を初めとして、次の四標目である。

七夕 九八首 最初の三五首が非略体歌、次の一首が略体歌、次の二首が非略体歌。

詠花 三四首 最初の一首が非略体歌、次の一首が略体歌。

詠黄葉 四一首 最初の二首が非略体歌。

詠雨 四首 最初の一首が非略体歌。

四標目とも、その標目下の冒頭に人麻呂歌集の非略体歌が置かれている。ここに卷七雑歌と卷十秋雑歌との共通性が認められることは言うまでもあるまい。

両者の相違点として指摘できるのは、卷七雑歌においては、「詠天」「詠葉」「行路」の三標目が非略体歌の一首または二首のみで独立した標目として立てられているのに対して、卷十秋雑歌においては、人麻呂歌集のみによって立てられた標目の存在しない点である。卷十秋雑歌では、非略体歌はすべて、相当の歌数の出所不明歌を擁する既存の標目の、その冒頭に補入された形を見せている。

これは何を意味するのであろうか。卷七雑歌の非略体歌のみから成る右の三標目は、雑歌部の最初の「天」部の冒頭に「詠天」が、中間の「地」部植物類の中ほどに「詠葉」が、最後の「人」部の末尾に「行路」が、というように共に重要な位置に置かれている。それは卷七雑歌部の「天・地・人」構成の一環であり、その要素となるものであって、卷七では、人麻呂歌集の非略体歌を採用してそうした標目そのものを新設することが、雑歌部全体の構成上必要であったと見える。それに対して、卷十秋雑歌部では、秋の季節とその順序とはすでにほぼ決定していて、人麻呂歌集歌による標目すなわち季節の新設は避けられたらしいのである。



しかし、独立した標目を付して非略体歌の入れられた巻七雑歌の場合といえども、その標目そのものが人麻呂歌集本来のものであったとは限らない。なぜなら、「就所発思」の場合のように、標目が古歌集のものであり、人麻呂歌集本来のものでないことの明らかなものが存するからである。

しかも、非略体歌のみから成る三標目のうち、「詠天」「行路」の二標目が、巻七雑歌部の最初と末尾とにあることは、むしろこの標目の新設が巻七撰者による新たな営為であったことを示している（拙稿「万葉集巻七雑歌部の成立」『古代文学』13 昭49年3月）。

以上を総合してみると、巻七雑歌部と巻十秋雑歌部における人麻呂歌集非略体歌の冒頭掲出は、共に巻七・十撰者による「補入」であったと言えそうである。右に見たような両者の相違も、けっして本質的な相違ではなく、巻七雑歌部と巻十秋雑歌部との共通性を否定するものではないと言わなければならない。

## (2) 略体歌の後尾補入

巻七の雑歌および巻十の秋雑歌において、類似する編纂手法の第二は、すでに掲出された人麻呂歌集非略体歌（または古集の歌）の後尾に、さらに略体歌を補入していることである。

見やすいところから言えば、巻七雑歌では、

詠山

動神之音耳聞卷向之檜原山乎今日見鶴鴨（一〇九二、非略体歌）

三毛侶之其山奈美尔兒等手乎卷向山者継之宜霜（一〇九三、非略体歌）

我衣色取染味酒三室山黄葉為在（一〇九四、略体歌）

右三首、柿本朝臣人麻呂之歌集出

「詠山」の冒頭に掲げられた「卷向の檜原の山」の歌（一〇九二）と「みもろのその山並み」の「児らが手を卷向山」の歌（一〇九三）と、この二首の非略体歌の後に、「うま酒三室の山」の略体歌一首（一〇九四）を補入している。この第三首を略体歌と見ることは阿蘇瑞枝氏も後藤利雄氏もその他の諸家も一致するところである。二首の非略体歌は「卷向」の山、略体歌は「三室」の山で、山は別であるが、非略体歌第二首の「三毛侶」の山名に誘われてその後

「三室」の山の略体歌を補入したものであろう。

これに対応するものとして卷十秋雑歌の次の例をあげることができる。

詠花

竿志鹿之心相念秋芽子之鍾乳零丹落僧惜毛（二〇九四、非略体歌）

夕去野辺秋芽子末若露枯金待難（二〇九五、略体歌）

右二首、柿本朝臣人麻呂之歌集出

後の一首が略体歌と認定すべきものであることは、かつて論じ（拙稿「万葉集における人麻呂歌集の採録」『万葉62』昭42年1月）、稲垣耕二氏も認めておられる。非略体歌の方は「しぐれの降るに散らくし惜しも」と散る秋萩を歌い、略体歌は「末若み露にぞ枯るる秋待ちがてに」と秋を待ちかねて枯れる末若い秋萩を歌う。前者は晩秋、後者は初秋で、別の歌であるが、共に「秋芽子」の歌なるがゆえに、略体歌がこの非略体歌の後に補入されたのである。

右の二例は、その標目の冒頭の一首または二首の非略体歌の直後に、それと同一ではないが類似する素材用語をもつ一首の略体歌が補入されている点において共通する。

卷七雑歌の「羈旅作」の途中に、第二十六首目と第二十七首目とは次のように並ぶ。

朝入為流海未通女等之袖通沾西衣雖干跡不乾（一一八六、古集）

網引為海子哉見飽浦清荒磯見来吾（一一八七、略体歌）

右一首、柿本朝臣人麻呂之歌集出

後者が略体歌であることは広く認められているが、この略体歌がここに補入せられたのは、「網引する海子」の第一・二句が、前者の「あさりする海をとめ」の第一・二句に類似する羈旅歌であったからだろう。前者が「古集」の歌であることは別稿（『万葉集卷七雑歌部の成立』『古代文学13』）に詳述する。ここでは「古集」の歌が非略体歌の代役を勤めているのであって、略体歌が類似の非略体歌または古集歌の後に補入されるという点では、前掲の二例と同じである。

次の諸例は、右の三例のように類似の非略体歌（または古集歌）の後に直接してではなく、略体歌を、それと類似

する非略体歌（または古集歌）を含む非略体歌群（または古集歌群）の後尾に補入するものである。

卷七雑歌の「羈旅作」の最後尾に、

右件歌者、古集中出

という左注があつて、その後四首の略体歌が置かれている。この左注の「右件歌」の範囲については、思いきつて拡大して見ることを別稿で提案した（『古代文学13』拙稿）。おそらくこれは「羈旅作」の標目を越えて遡るであろう。その範囲はともかく、この略体歌四首は、「羈旅作」を中心とする「古集」の歌群の後尾に補入されたものと考えられる。

では、この四首の略体歌は、なぜ「古集」の歌群の後尾に補入されたのであろうか。それは、たとえば、卷七撰者が漠然と羈旅歌らしい略体歌を見つけて来て、ただ「羈旅作」の標目だけを頼りに、その後尾へ付載した、といったようなものであつたらうか。それとも、もっと何か拠り所があつたのか。

それを考えるのに参考になるのが、卷十秋雑歌の「七夕」の例である。それを先に見ておこう。

卷十の秋雑歌の第一標目は「七夕」である。その標目下の冒頭に三五首の非略体歌群（一九九六～二〇三〇）が掲出されていることは、前に述べた。その非略体歌群の後尾に一首の略体歌が補入されている（これについても『万葉62』の拙稿に述べ、稲岡氏の賛成を得ている）。

吉哉雖不直奴延鳥浦嘆居告子鴨（二〇三二、略体歌）

この一首は、七夕歌ではなく、おそらく「奴延鳥」によって原本略体歌部では鳥類に分類配列されていた寄物陳思の恋歌であろう。それがこの「七夕」の非略体歌群の後尾に補入されたのは、この非略体歌群の第二首に、

久方之天漢原丹奴延鳥之裏歎座都乏諸手丹（一九九七、非略体歌）

という類句歌があるからである。この「ぬえ鳥のうらなけましつ」が略体歌の「ぬえ鳥のうらなけをり」と類似した表現なので、その歌を含む非略体歌群の後尾に補入されたものと考えられる。

卷七雑歌の「羈旅作」末尾の四首の略体歌も、もしその「羈旅作」歌群（古集）の中に類似の歌句をもつ歌や類似の歌があれば、それらの歌を含む歌群の後尾に補入されたものと考えてよいであろう。

四首の略体歌中の第一首は、

大穴道少御神の作らしし妹勢能山を見らくしよしも（二二四七）

である。ここに詠まれている「妹背の山」は、この歌群中にも、「右七首者、藤原卿作」と左注する中の一首、

麻衣著ればなつかし紀伊の国の妹背之山に麻蒔く吾妹（一一九五）

それよりもさらに前にある四首（古写本によって順序すればこの四首は並記されている）、

勢能山に直に向へる妹之山ことゆるせやも打橋渡す（一一九三）

妹に恋ひわが越えゆけば勢能山の妹に恋ひずて有るがともしき（一一〇八）

人ならば母が最愛子ぞあさもよし紀の川の辺の妹与背山（二二〇九）

吾妹子にあが恋ひ行けばともしくも並びをるかも妹与勢能山（二二一〇）

以上の五首に詠まれており、巻七雑歌中にはこれら合計六首以外に妹背の山を詠んだ歌は無い。

四首の略体歌中の第二首

吾妹子と見つつ偲はむ沖つ藻の花さきたらば我に告げこそ（二二四八）

この「沖つ藻の花」を「吾妹子」になぞらえる発想は、やはり「羈旅作」の第八首と第九首、

あさりすと磯に吾が見し莫告藻をいづれの嶋の白水郎か蒞りけむ（一一六七）

今日もかも沖つ玉藻は白浪の八重折るが上に乱れてあるらむ（一一六八）

この二首のほかには、その前の標目「撰津作」中の一首、

梶の音ぞほのかにすなる海未通女沖つ藻蒞りに舟出すらしも（一一五二）

があるのみで、この一首の「奥藻」は略体歌第二首と表記もひとしく、それを蒞りに舟出する「海をとめ」の歌われ

るのも、略体歌の「花咲きたらば我に告げこそ」と呼びかける対象を思わせる。

四首の略体歌中の第三首

君がため浮沼の池の菱探むと我が染めし袖沾れにけるかも（二二四九）

この歌と結句を同じくする歌が、直前にあり、

ぬば玉の玄髪山を朝越えて山下露に沾れにけるかも（二二四一）  
また前にもあげた次の一首は、

あさりする海をとめらが袖通り沾れにし衣干せど乾かず（二一八六）  
女の袖が濡れることを歌う点が似ており、「撰津作」の、

妹がため貝を拾ふと陳奴の海に沾れにし袖は干せど乾かず（二一四五）

この一首は、略体歌の「君がため」に対する「妹がため」、「浮沼の池」に対する「陳奴の海」、「菱採むと」に対する「貝を拾ふと」、「我が染めし袖沾れにけるかも」に対する「沾れにし袖は干せど乾かず」と、実によく対応した類想歌だと言ふことができる。

#### 四首の略体歌中の第四首、

妹がため菅の実採みに行く吾は山路に惑ひ此の日暮しつ（二二五〇）

この歌は、同じ「羈旅作」中の次の一首と、

妹がため玉を拾ふと紀伊の国の湯等のみ崎に此の日くらしつ（二二三〇）

初句・結句を同じくする類句類想の歌である。

以上のように、四首の略体歌が例外なく「羈旅作」「撰津作」に類句歌・類想歌を有しているのであって見れば、単に漠然と羈旅歌なるがゆえに、というにとどまらず、「七夕」中の略体歌一首の場合に準じて見ることができらる。すなわち、これら「古集」の歌群の最後尾の略体歌四首は、「撰津作」「羈旅作」の標目下の古集所出歌群中に、それらとの類句歌・類想歌が散在するゆえをもって、一括してその歌群の最後尾に補入されたものと考えられる。

「羈旅作」第二十七首の略体歌一首の場合と同じく、「羈旅作」末尾の略体歌四首においても、古集所出歌群が人麻呂歌集所出の非略体歌群と同じ役割を果たしたことになる。

さて、このように見て来て生じる一つの疑問は、同じく古集所出歌（群）の後に補入された略体歌でありながら、なぜ一首（二一八七）のみは「羈旅作」の途中の類句歌（二一八六）の直後に補入され、四首（二二四七～二二五〇）は

「羈旅作」の末尾に補入されたのか、ということである。これについては、後藤利雄氏の次の言が当たっている。

人麻呂歌集の一四七―一二五〇の四首の如きは、卷七編纂時に、何処に置くべきか迷った末に羈旅歌の末尾に据えたものである。一一八七（歌略―渡瀬）の一首は、完全な羈旅歌であるから躊躇なく前にもっていったものであろう。然し一二四七―一二五〇の四首は完全な意味での羈旅歌とも言えないので、かくは遠慮した姿で末尾に置かれることになったものと見られるのである。（『万葉集成立論』昭42年5月、二二九ページ）

「飽の浦の清き荒磯を見に來し吾」（一一八七）と歌う主体が羈旅にあることは言うまでもない。それに対して末尾の四首が相聞的性格の濃いものであることは、はやく森本治吉氏がこの四首以後を相聞部とされて（『万葉集卷七考』『国語と国文学』昭2年8月号）以来、人々の注目して来たところである。

卷十秋雑歌の「七夕」歌群への略体歌の後尾補入についても、後藤氏の説明は適用できる。非略体歌群三五首の後尾に補入された略体歌一首は、単なる恋歌とも見られるもので、完全な意味での七夕歌ではないからである。

最後に、卷七雑歌部最末尾の旋頭歌について述べるべきであるが、これには略体・非略体の認定に關して言うべきことが多く、紙数が足りなくなるので省略に従いたい。ただ結論だけを言えば、ここでも、先行する非略体旋頭歌群の中に発想の類似を有する略体旋頭歌が、非略体旋頭歌群の後尾に補入されているのである。

以上によって、卷七の雑歌と卷十の秋雑歌とは、人麻呂歌集に対して全く共通の態度で臨んでいると言える。すなわち、両者は共に、その非略体歌を掲載するに際しては、第一標目を初めとする数標目の冒頭に掲げ（補入し）てこれを尊重し、略体歌は時間的にも後に、空間的にも非略体歌（群）または古集歌（群）の後尾に、これを補入している。しかし、略体歌の補入が非略体歌（群）または古集歌（群）の後尾になされているゆえに、略体歌は非略体歌（古集歌）に準じて尊重せられたのだと言えるだろう。

ところで、卷十の雑歌部の人麻呂歌集非略体歌のありようは、秋と春・冬とでは、だいぶ違っている。この相違をどう解くかは、従来まだ十分には果たされていない課題である。以上に見たように卷十の秋雑歌部の姿が卷七雑歌部と共通するものだけということになれば、その秋雑歌と他の季節の雑歌とはどのような関係にあるかが問われなければならぬ。

### 三、卷十の春・夏・冬の雑歌

卷十の夏雑歌部には、その第一標目「詠鳥」の冒頭に「古歌集」の長反歌（一九三七・一九三八）が掲げられている。これは秋雑歌部と基本的にひとしい態度である。なぜなら、第一に、人麻呂歌集の非略体歌が掲げられていないのは、人麻呂歌集の原本非略体歌部に夏歌群が無かった（拙著『柿本人麻呂研究歌集編上』第二章）からであって、卷十夏雑歌の側の責任でないことがあげられる。第二に、「古歌集」は卷七雑歌部でも人麻呂歌集非略体歌と同等あるいはそれ以上の待遇を受け、尊重された歌集であった。「就所発思」の標目下の分析によって、そのことはすでに明らかであろう。「古歌集」と「古集」が同じ物であるとすれば（その可能性は高いと考える）、略体歌をその後尾に補入すべき対象として、それは非略体歌の代役を勤めたものでもあった。第三に、「詠鳥」が夏雑歌の第一標目であり、しかもその冒頭に非略体歌の代役として古歌集歌が掲げられているからである。卷七雑歌部の第一標目「詠天」と、卷十秋雑歌部の第一標目「七夕」と、そしてこの夏雑歌部の第一標目「詠鳥」とは、ひとしい姿だと言ってよいのである。

卷十の春雑歌と冬雑歌とは、その冒頭部に非略体歌群を置いている。しかし、秋雑歌（および夏雑歌）のように標目下の冒頭に掲げるといふことをしていない。「春雑歌」「冬雑歌」の部立の次に、いっさい標目を付せず、春雑歌には鶯の非略体歌七首（一八二二、一八一八）を、冬雑歌には鶯の一首（二三二二）と雪の三首（二三三三、二三三五）と非略体歌四首を、それぞれ一括して掲げている。

同じ卷十の雑歌でありながら、春・冬においては、なぜ夏・秋とは異なった非略体歌の掲げ方をしているのであるか。

はやく武田祐吉の『上代国文学の研究』（大正10年3月）の指摘したとおり、卷十は「春雑、春相聞、夏雑、夏相聞いづれも詠鳥寄鳥を最初に置く」（二三〇ページ）という配列法を有している。いま、この四部の標目を出現順に並べてみると、次のようになる。

譬喻歌	旋頭歌	權逢	飲旧	野遊	詠煙	詠河	詠雨	詠月	詠花	詠柳	詠霞	詠雪	詠鳥	春雜歌	
	問答	悲別	贈獲	寄雲	寄松	寄草	寄雨	寄霞	寄霜	寄花			寄鳥	春相聞	
譬喻歌	問答									詠花	詠榛		詠蟬	詠鳥	夏雜歌
							寄日	寄露	寄花	寄草			寄蟬	寄鳥	夏相聞
							天		植物				動物		

まず四部に共通するのが、動物の「鳥」と植物の「花」とである。これは例の額田王の、  
冬こもり春さりくれば 鳴かずありし鳥も来鳴きぬ 咲かずありし花もさけれど……(一六〇)  
こうした歌に代表されるような、春の到来をまず「鳥」と「花」とによって歌おうとする感覚や観念とかかわるもの



であろう。

卷七雑歌・卷十夏雑歌・秋雑歌に共通する手法をとれば、春雑歌では第一標目たる「詠鳥」の冒頭に非略体歌を掲げなければならぬ。そうでなければ人麻呂歌集尊重の形式が整わないのである。しかるに、人麻呂歌集の非略体歌には春の鳥を詠んだ歌が一首も無い。現万葉集所載の非略体歌に一首も無いのみならず、原本非略体歌部にも無かったであろう。第一標目の冒頭に非略体歌を掲げるという原則がまず崩れざるをえなかった。

卷十撰者の前に原本非略体歌部の春歌群からもたらされたのは、典雅流麗の霞の歌七首であった。当然これを第一標目の冒頭に飾るために「詠霞」の標目を第一に置くことが考えられたであろう。実際、春相聞の部では「寄霞」などの天部が「寄花」よりもあとに置かれているのに、「詠雪」「詠霞」が「詠花」よりも前に出（天部が二分されて）、「詠霞」は第三標目の位置に移動している。第三標目から第一標目へは、今一步のところであったろう。しかし、それを実行すれば、卷十の春・夏の四部に一貫している「鳥」を最初に立てるといふ配列方針に反することになる。その一線を踏み越えることはできなかったものと見える。

ここに折合がつけられねばならない。そこで案出されたのが、非略体歌の霞の歌七首を、標目を付せずに春雑歌冒頭に掲げるといふ便法であった。これによって、卷七・十雑歌部に共通する非略体歌尊重の原則と、卷十春・夏の雑歌・相聞四部に立てられた鳥優先といふ標目の配列方針とが、共存しうることになったのである。

卷十の冬雑歌に、人麻呂歌集の原本非略体歌部から、もたらされたのは、

わが袖に雹あられたばしる巻き隠し消たずであらむ妹が見むため（二三二）

という、卷十撰者などにはおもしろく感じられたであろうと思われる雹の歌一首と、雪の歌三首とであった。そして冬雑歌の標目は、次の五種で、

詠雪、詠花、詠露、詠黄葉、詠月

右のように配列されている。雪の非略体歌三首を第一標目たる「詠雪」の冒頭に飾りさえすれば、夏雑歌や秋雑歌と同じ正統的な形式ができあがったはずである。しかし卷十撰者は雹の歌の扱いに、しばらくは困ったであろう。冬雑歌の「詠雪」一〇首は、すべて「雪」の歌で、雹だの霞だのは一首も無い。もっとも冬相聞の方は

寄露、寄霜、寄雪、寄花、寄夜

と配列されていて「雪」が第一標目でないばかりか、「寄雪」の冒頭には「はだれ」(二三三七)や「霰」(二三三八)が一首ずつある。しかし、雑歌は相聞とあまり交渉をもたなかったらしい。冬雑歌の第一標目の「詠雪」冒頭部に「雹」の一首を掲げれば、「詠雪」としては不純な夾雑物を投げこまれることになる。かといって、非略体歌一首の雹の歌をもって、独立した「詠雹」の標目を新設することは、先に秋雑歌に関して見たように、卷十雑歌部の流儀ではない。

そこで、すでに春雑歌において編み出されていた便法に従うことにしたものと思われる。その結果、雹の歌一首と雪の歌三首との非略体歌群が、「冬雑歌」の冒頭に標題を付せずに一括して掲出されたのである。

以上によって、卷十の夏雑歌・秋雑歌と春雑歌・冬雑歌との間に存する、非略体歌・古歌集歌の掲出法の相違は、実は大した相違ではなく、その非略体歌・古歌集歌尊重の原則と標目配列の方針とを共に同じくするものであった、と言えよう。そして人麻呂歌集非略体歌の扱い方において、卷十では特殊のもののように見える秋雑歌部の編纂手法は、実は卷七雑歌とも共通する、卷十雑歌としては最も正統的なものであり、春雑歌・冬雑歌の方が便法にすぎないのであった。

では、卷七の雑歌部と卷十の雑歌部とに、基本の尊重的態度を同じくしつつ補入採録された非略体歌は、いかなる原本から、いかにしてもたらされたか。次には、そのことが、具体的に説明されなければならず、さらには、卷七の譬喻歌部および卷十の相聞部と、人麻呂歌集(略体歌)との関係についても、同様の説明がなされなければならぬ。かくして、万葉集の卷七と卷十との成立過程は、いっそう明らかになるはずである。